

■（101）顔写真の誤報から思う、ノートの大切さ

新聞やテレビが相次いで謝罪している。兵庫県尼崎市の連続変死事件で、中心人物と思われる女として報道してきた顔写真が、別人のものと判明したからだ。間違われた女性にとっては重大な人権侵害で、各社は「おわび」を掲載・放送した。

取材現場で大人の顔写真を探すのはひと苦労だ。親がビデオなどで成長を記録したがる子どもとは違って、大人が写真に収まる機会は、じつは少ない。地域の行事や旅行の記念撮影ぐらいだろう。今回も多くの新聞・テレビが入手できたのは、19年前に学校であった行事の集合写真だった。

各社の検証記事を総合すると、この行事の参加者の1人をその女と勘違いした人たちから写真を提供してもらったらしい。もちろん、取材の原則にのっとり、ほかの複数の人に確かめてもらったものの、誤りには気づかなかったという。「断定できない」とか「違うかも」と疑問を示す人もいたが、踏みとどまれなかったようだ。激しい取材競争の中で、起こりうる事態かもしれないと思うと、記者の誰もが深刻に受け止めなければならないミスだと思う。

私自身は、昔の写真で人物を特定する自信はない。記憶は基本的にあいまいで、いいかげん。だから、取材でメモや写真をとる。学校の授業でノートをとるのと同じ理由です。

（山）